

第4回「越境と郷愁」研究会開催のご案内

金沢大学人間社会研究域附属グローバル文化・社会研究センター越境文化部門では
ゲストをお招きし、12月7日（木）15時より人間社会1号館301教室において「越境と郷愁」研究会を開催いたします。

私たち越境文化部門では、共通テーマとして「郷愁」を取り上げ、定期的に研究会を開催しております。その第4弾として、四方田犬彦氏（元・明治学院大学）をお招きすることになりました。さらに本研究課題グループより岩津航、杉山欣也が発表します。ぜひご来聴ください。

プログラム：

15：00～ 趣旨説明

15：10～ 発表1：21世紀のオデュッセウス小説 岩津 航（金沢大学人文学系）

アルゼンチンの作家ボルヘスは『オデュッセイア』を「人類が書いた最高の物語」と評した。帰郷と冒険という二つの相反する要素を備えたこの叙事詩は、戦争と移民の時代となった20世紀に、数多くの作家にインスピレーションを与えた。その流れは、21世紀になっても続いている。本発表では、サリム・バシ『オデュッセウスの犬』、アーノルド・ゼイブル『また帰り来る海』、エリック・エマニュエル・シュミット『バグダッドから来たユリシーズ』などを取り上げ、家族の物語として読み直される21世紀の「オデュッセウス小説」の諸相を紹介する。

15：40～ 発表2：ブラジル日系短歌における「郷愁」をめぐって—岩波菊治を中心に
杉山欣也（金沢大学人文学系）

1908年以降、ブラジルには日本より約20万人が移民した。彼らの拠り所として日本語の使用と、日本語による創作活動がある。俳句、短歌などではそれぞれ日本の「ホトギス」「アララギ」によって権威づけられた作者が指導者として組織化に成功し、日本語文芸を隆盛に導いた。本発表では歌人・岩波菊治の活動に触れる。岩波は1925年の移住以来1952年の逝去に至る間、短歌を創作し、日本語新聞の選者を務めることでアララギ調の短歌を現地日本語コミュニティに定着させた。彼の作家活動と没後の展開を通して、移民の感情表出として「郷愁」の内実を明らかにする。

16：30～ 講演
越境の食卓 四方田犬彦氏

講演者略歴：四方田犬彦氏は大阪府箕面出身、映画・比較文学研究家、エッセイスト、詩人、小説家。東京大学で宗教学、同大学院で比較文学を学ぶ。長らく明治学院大学教授として映画論を講じた。世界各地の大学にて客員教授、客員研究員を務めた。斎藤緑雨文学賞、サントリー学芸賞、講談社エッセイ賞、伊藤整文学賞、桑原武夫学芸賞、芸術選奨文部科学大臣賞、鮎川信夫賞などを受賞。最新刊『サレ・エ・ペペ 塩と胡椒』（2023.10、工作舎）など、170冊近い著書がある。

18：00 終了予定

※なお12月8日（金）に、本部門所蔵資料の内覧会を開催する予定です（会場未定）。

【問い合わせ先】

杉山欣也（金沢大学人間社会研究域附属グローバル文化・社会研究センター長）

E-mail：kinkin-s@staff.kanazawa-u.ac.jp